Graded Direct Method Teachers' Group News Bulletin

News Dullett

1971年 5 月28日

第 23 号

英語教授法通信 1971年

編集・発行・英語教授法研究会 事務局 東京都世田谷区豪徳寺2-27-19 吉沢美穂方 TEL. (429) 5929

意味の本質とG.D.MのD

室 勝

意味の本質というのは、意味というものがあり、その本質は何かと考えることではない。意味ということが又は意味という現象が生ずると考えるべきである。私がこういう考えに到達したのはBasic English を通じ、意味論に興味をもつようになったためである。人には観念的な傾向を持つ人もいるし、行動主義的な、刺戟と運動によって考えるたちの人もいる。私は後者の考えにひかれるし又どちらかと言えばこのタイプの人間であると思っている。

場所があり、時があり、言う人、聞く人がいてその人達の過去の経験があり、その中で感じとれるその瞬間に意味が生ずるのであると思っている。

意味が辞書にあるというのはまちがいで、 結論的には辞書には意味のなきがらが書き集 めてあるにすぎない。といっても辞書が無意 味というのではなく、それを見れば実際に意 味が生ずるときの参考になる。要はその用い 方にある。book は本ではない。今私が「本」 といっても、それだけでは聞いている人には ったしが何を言おうとしているのか分らない。 さらに又くりかえして「本」といったら、バ カじゃないかと思われるだろう。「あれは何 ですか」ときかれ、「本」といえば分る。又指さすなり、何か動作が伴なうと、即ちsituationの中でなら、それが意味をもつことになる。辞書を暗記するために、そのページを一枚一枚食べたという人の話を聞くが、暗記してもコトバは知ったことにはならない。

Direct method以外にはコトバの意味を伝えることができないのではないか。去年,御殿場の夏季セミナーに参加して,皆さんの目が輝いているのを見た。身を入れて英語を話している。吉沢先生が,demonstrationの批評のなかで,生徒が記憶にたよって英語を話していることを注意されていたが言話すときに記憶にたよるのは一概に悪いとはいえないが行動,動作と結びついた記憶でないとだめなのではないか。言う時に身が入っていることが大切なので,単なる日本語のおきかえではダメであろう。

バートランド・ラッセルを原文で読んで, だいたい分るらしい大学生が,しゃべること も書くこともできず,説明させてもうまくで きないことがある。文法の助けと辞書で日本 語に直してそれが分かるらしい。人間は人種 がちがっても,共通の概念をもっているから 理解が可能なので,日本語に直して分かると いうことはそれなりに一つの能力ではあるが、そのばあいは彼らが英語がうまくなったのではない。東南アジアの人々が日本人より英語がうまいのは、日本人ほど高い言語文化をもっていないからではないか。日本人が明治維新の時にもっていた程度の、外国の文化におきかえうるだけの自国の言語文化をもっていないから、東南アジアに英語の本が輸出されそれがそのままtextに使われるし、ストレートに外国語をとりうるのではないか。しかしこれはあくまでもわたしの仮説である。

アメリカ人やイギリス人が日本に来て、学生達がラッセルなどを読んでいて、その水準の高さに驚くが、その同じ学生が"What is this?"というような簡単な質問にも答えることができないのに二度びっくりするという例がよくある。G.D.M でやってきた人が最後までdirectで通すことは現状ではムリであろう。しかし、いつか英文和訳などで学ばなくてはならないはめにおちいった時でもdirect methodで具体的な物、動作と結びついて言語を修得してきたことが非常に役に立つと思う。

次にgradeについて。direct methodはいろいろな教授法でもやっているが、gradeのことを強調するのはG.D.M しかない。我々の母国語の勉強は、全くゼイタクな環境の中で行なわれている。一つ一つ具体的な状況の中で、日本語を修得でき、その中からあるruleをみつけだすことが可能であるが、外国語の修得には我々日本人にとって時間の点でも環境でもきわめて貧弱であるから母国語を学ぶ時のようにはいかない。子供は2~4歳で一番言語能力を発揮すると言われている。

頭脳が発達すると人間は利口になるが,言語 修得に関してはバカになるというのが心理学 の教えるところだ。7~8歳は12~13歳より はあるいはよいかもしれないが、しかしもう 母国語が根をおろしている。だから外国語を 習うのにgrade をやかましく考えないと骨組 みがいつまでもできない。身にこたえながら 使ってわかりながらやっていくことが大切 だ。G.D.Mは、子供が英語にうまくなると いうだけでなく、言語がどんなものか分らせ る効果があると思う。G.D.M で直接、経験、 動作と結びついてgetやgiveを習っておくと、 あとで複雑なものにふれたとき, 例えばbuy やsell がでてきても、新しい言葉としての「 買う」や「売る」でなく、getやgive をもと にして考えるようになる。直接我々の経験に 結びつきうることが表現力のもととなり、そ れがなければ表現はできないのではないかと 思う。

コトバに意味が一つだけならいいがと思う 人がいるかも知れないが、もしそうのは、この場でで話しているのは、この場限りのことで、明日話したら今とではまちず。 私の心の状態、 天候も一つと見が無限の心の状態、 スの世界には現象が悪るのはないだろう。この世界には現象が無いたのはないだろう。この世界には現象が無いである。即ち表現すであるである。年れしては語数が850でも、5万でも大いはない。5万知っていれば、1万の5倍表現で文脈でギッチリ固められたところである。場にで文脈でギッチリ固められたとの場限りできまるものなのである。

(一4月、鎌倉グループで行われた講演を山田が しまとめ、室先生に check していただいたもの)

> チャールズ・E・タトル商会 神 田 店 東京都千代田区神田神保町1-3 TEL. (291) 7071 高島屋店 東京都中央区日本橋高島屋 6階 TEL. (211) 5029

G. D. M Preliminary Seminar の報告

月例研究会では討論に十分な時間が取れないので時間をかけてdiscussion をすること、 夏のセミナーに備えて、グループごとの研究 課題の中間まとめをすることを、目的として Prelininary Seminar が開かれた。

1971年3月31日から4月1日まで3日間,午前10時から午後4時まで,40人の参加者が熱心に討論をした。参加者のうちには関西支部関係が10人,また2日目には室勝先生も見えて有益な発言があった。

3日間にやったことを項目により大別すると 次の通り。

II. Business

- II. Project の中間報告。9月に東京支部例会で、4つのグループを作り、各グループ別に与えられた研究課題について勉強した結果の中間報告。
- III. 生徒の種類別に別れてのdiscussion
- IV. 成人教育についての報告とdemonstration
- V. 一般的なdiscussion

以下項目別に、3日間をまとめて、その経過と結果を報告する。

I. Business

A. 各支部の活動

- 1. 東京支部
 - *毎月1回月例会の報告と,次期月例 会の案内を出す。
 - *月例会は、demonstration と、研究 発表または lecture の 2 本立て
 - *第3日曜日, 有志によるBasic Enlish 研究会
 - *1年に1回公開講演会
- 2. 関西支部
 - *月に1回支部ニューズ発行
 - *3, 4カ月に1回, 研究会

*輪読会

- 3. 鎌倉グループ (G.D.Mのメンバーで ない人も含まれているので独立して いる。
 - *毎月1回例会, demonstration と discussion 其の他話しあい。
 - *鎌倉G.D.M ニューズ発行
 - *東山さんを中心に, training course を適時開く。
 - *1年に1回、東京支部と合同研究会
- 4. その他, 全国的規模で8月にSummer Seminar が行われる。今年は, 8月17日から5日間。御殿場で。
- B. 話し合いの上決ったこと。
 - 1. ニューズがそれぞれの支部の会員だけにしか届かないのはもったいない。それぞれの性格が違うので1本にすることは難かしいが、とにかく東京支部のニューズは、全国の会員に配る。全国の会員に知らせたいニューズは、東京支部に原稿を送る。
 - 2. 対等の意識で東京と関西は両方支部 になっているが、従来会計上は、本 部、支部のように、関西の会員の一 部を東京の会計上に入れていたのを 止める。

II. Project の中間報告及びdiscussion

- A. 東山グループ (鎌倉グループ) -ETP Book 1のword list 作成
 - *目的は①頁別に単語の頻度を調べた表をつくる。②単語の意味の広がりを調べる。ETPを使いこなすのに便利な、パッと見てすぐわかるような表を作るという意図は、やってみると膨大なものになるので、まとまりがつきそうにない。しかしまだP.

- 121 までなので、今後もグループ全員の努力によって、もっと簡単な表現方法を工夫して夏までにまとめたい。
- *この研究を通してETPは,ことばの 意味を考えさせられる本であることを 強く感じた。
- *単語のroot sense から意味の変化を 調べると、どこから変化すると決めら れないことが多い。
- *大阪でも似たような研究をしたが、意味の変化に境い目がつけられなかったことは、まったく同感。
- B. 成井グループー各段階に応じたreading material の開発
 - *やっているうちに、reading material とは何だろう。Reading material は 必要なのかというような疑問にぶつかった。
 - *各段階のexercise として, word order の並べかえ, fill the blanks, make sentences などをやって, でき上ったものをreading materialに使う。.
 - *People in Livingstone の足がかりになるように、Moore 家の人の名前を使って各段階に応じたstory を作成した。
 - *出版されているやさしい物語りの本の 英語を、生徒に教えた文になおそうと したが、単語の点で無理があることが わかった。絵だけを見せて、生徒に作 文させると、新鮮な文を作るので、順 を追って絵を与え、子供にstory を作 らせることができることがわかった。
 - *以上に対してdiscussion の結果。生 徒の年令別に、ETPの各段階に応じ てoriginal なreading material があ ることが望ましい。
 - *G.D.M の会員全員が, 自分で作ったものを, 自分のクラスだけに使って宝の

- 持ちぐされにならないように、何でもいいから成井さん宛に送ること。 成井グループで整理する。
- C. 箕田グループーETPの単語と文部省 指導要領の中学校必修単語の比較研究
 - *現時点までの作業としては、ETPIとPrince Crown のI~IIIまでの単語を比較して、検定教科書にだけ出ていてETPにないものを、Basic English で書きかえてみた。書きかえられない語もある。
 - *ETPにない単語のうち、教科書に動詞が多く出てくることは容易に想像できるが、ETP、Iを使っていても、pp. 97~ 269の中にあるように、-ingの形でdirect に動作を示すものとして大部分が解決しそうだ。
 - *心の状態を示す, want, like, need, know などは, あまり早く教えたくないがこの点どうか。
 - *以上に対してdiscussion の結果,検 定教科書にだけある単語をBasic English に書きかえる作業はあまり意 味がない。
 - *ETP, Iを学校で使う場合, 3年かかるわけではないので, 3年間の教科 書に出る単語と, ETP, Iを比較するのは適当でないのではないか。
 - * ETPになくて、教科書にある単語よりも、反対に、教科書になくて、ETPにある単語の研究のほうが重要ではないか。
 - *以後の研究としては、structure words がどのように使われているか、その他 文型、意味など、単なる単語の比較で なく、単語の cover する意味領域の 考察までもっていきたい。
 - *以上のほか、ETPを中学で使う場合 の諸問題についても討議されたがこれ

- D. 唐木田グループーETPに関して発音 についての研究
 - *まず発音とは、①intonation ② rhythm
 ③individual sound を含むと考える。
 その個々についての説明があった。
 - *今までやったことは、日本人にとって重要な音を書き出し、各項目につき、その音を含む単語がETPのどのページに出てくるか単語のリストを作った。p.121まで。
 - *将来の研究としては、個々の音はp.50までに出揃うので、p.50までに限って、現在までの研究に加えて、音の種類の項目をもっと広げて、あらゆる点で検討する。
 - *発音指導について、実際に授業をする場合について、授業のどの段階で指導するか、教師が教業の重点として扱うstructvse words にはふつうstressがないことに注意する必要がある、その他について熱心な討議があった。
- III. 生徒の種類別に分かれてのdiscussionは 第2日目に行われたが、この分科会のほ か、一般的discussion でもこの問題が 取りあげられたので、これらをまとめる と次のようになる。
 - A. 小学校、家庭のクラス関係
 - *能力差について。G.D.Mでやると能力 差はかなり縮まる。
 - *Writing はどこから入れたらよいか。 低学年でも始めから入れるとよい。 筆記体は、書きたがる子供には書かせ るが、むりに教えなくてよい。
 - *進度の規準について, 週2回のクラス の例(小学校)

例 1 例 2

3年 p.26

4年 p.40 4年 p.35

5年 p.76

5年 p.76

6年 p.135

6年 p.135

*前から別の方法で英語を習っていた子供が4年からG.D.Mに切りかえた場合,生徒が興味を示さないか。低学年でもG.D.Mでやれるから,別の方法で始めるよりも,早くからG.D.Mでやるほううがよい。たとえば単語などを主として教える場合も,G.D.Mを頭においてやったほうがよい。

B. 中学校

- *中学校でG.D.Mをやる場合の諸問題に ついては、いつものように果てしない 討論が続けられたが、このセミナーで 結論が出るはずもない。以下持ち出さ れた意見をあげるにとどめる。
- * ETPを教科書と同時に併用すると, 学習者に積極的な発言させる雰囲気が 作りにくい。
- *3年間を単位に予定を組めるなら、E TPを2年2学期までにすませ、3学 期に1、2年の教科書をすませられる。 3年のはじめに他のクラスと足並みが 揃う。
- *1年1年が勝負である。先生がかわる。 生徒の組みかえがある。
- *1年単位ならば、2学期までに、重要でないところは飛ばしてp. 120までに すませられる。
- *ETPを中心にして、教科書は、grading に合ったところをつまみ食いする。
- *教科書にはいる前に、ETPをすこし しかできないならば、p.50くらいまで ならやらないほうがよい。
- *p.50まででも, たとえp.30まででもやったほうがよい。

- * ETPがうまくできる見通しがついて からやるべきだ。いいかげんにするく らいなら、しないほうがよい。
- *たとえ、全面的にETPができなくても、grading はギセイにしても、G.D. M的手法だけでもやってみる価値がある。そのうちに、grading も自分でかえたくなる。
- *自分はG.D.M が最上の方法だと思うから、どうしてもやる。
- *学校関係にG.D.M が広まっていかない 所に問題がある。名人芸という印象を 与えるのがよくないのではないか。会の の姿勢にも問題があるのではないか。
- *G.D.M はminority でよい。かなり多数が反対意見。
- Ⅳ. 成人教育についての報告とdemonstration A. 語学研修センターが成人用にG.D.Mを 使っているクラスの1例についての報 生
 - *生徒は20名。30代後半から40代副課長 クラス。
 - *1回 100分授業。週2回—後半は3回。 総時間76時間40分。
 - *生徒の出席率93%。欠席はすべて出張 等止むを得ない理由。なまけなし。
 - *結果 ETP, Iを終った。生徒はは じめびつくりしたが大そうよろこんだ。 うまくいったクラスと言える。
 - *この間に5回チェック・アップ。絵を 見て文を言わせてテープにとるなど。
 - *以下成人教育について、学校と違う点など。
 - ●学校のように生徒、教師間の人間的 交流がとりにくい。
 - ●学校では横道にそれた授業も時には できるが、時間ギリギリしなくては ならないのがつらい。
 - 1 時限が長いうえ進度が早いので、

- 学校の授業の4倍くらい用意をし なくてはならない。
- ●内容法については、学校よりも気 らくにgrading を気にしないで使 える。
- *成人でもreading, writing が必要。教師の時間かせぎにもなる。
- ■コースを始める前に、G.D.Mで授業をするのだということについて 十分に説明する必要がある。
- B. Demonstration

2日目と3日目に、成人教育と仮定して、参会者が生徒になって行われた。 西村さん—give、its、of 稲垣さん—get 稲田さん—where (relative)

相田さん―where (relative)
唐木田さん―after, before (conjunction)

いずれもcontent, word は子供のクラスより多く使い,盛りだくさんの討論の続いた日程の最後の時間で,ぐったり疲れていたところを,元気を盛り返えさせるように,笑い声も聞えるようなdemonstration だった。

V. 一般的なdiscussion

- A. 第1日目には、大阪北YMCAの星野主事からの質問の手紙を中心にして討議を行った。途中から他のことにも脱線していったが、その時に出た意見をいくつかあげる。
 - *指導法が固定化する恐れはないか。 教師が最良だと思う方法をとれば、 毎度同じ教えかたをする。これは固 定化とは言えない。生徒は毎年かわ る。ただ、教師が慣れから教えかた がいいかげんになってはいけない。
 - *G.D.Mではdrill の量に問題はない か。SEN-SIT を伴わない, いわゆ る pattern practice 式の練習をい

- くら増しても役に立たない。Situation に応じた発表は、特にdrill と銘打た ないでもどんどんやれるはず。
- *Natural speed の問題。生徒が発表する時は、思考を伴うので、ある程度スピードがおそくなるのは仕方がない。文がよく言えるようになってから、またreading の段階で speed up するとよい。しかし教師は、はじめから、英語のリズムを乱さない程度に、naturalに言い、生徒にも、1語1語をばらばらに言わないで、すくなくとも sensegroup は natural speed で言うように指導する必要がある。
- *G.D.M が他の方法と最も違う点は、生 徒が自発的に発言するか、教師が促し てはじめて生徒が発言するかにある。
- *教師の個性が出るのも、もちろん大切だが、今までのdiscussionを聞いていると、どの問題も先生がうまいかどうかにかかっているという結論になるようだが、ふつうの人、未熟な人でもこうすればできるというやりかたを教えてほしい。
- *教えかたがうまくなる内は、まず教えてみることが一番大切。たとえば導入で一番大切なのは、生徒の注意が集った瞬間をつかまえるtiming にあるがこれは口では説明できない。
- B. 第2日目には、午前のdiscussion で「Basic English」を英語学習の初歩の段階でやることは、物の見方自体が変化する。」という発言に対して、「物の見方がかわるというのは、よくわからない。」という質問が出たところに、室先生が突然見えたので、午後には、この問題から、室先生を中心に、討議を進めた。以下Mとあるのは室先生。
 - *M:Basic をやると言葉に対する態度

- がかわる。現実の動き、見るもの、さ わるものが一体となって始めて言語の 意味がわかる。使ってみて現実との結 びつきによってわかるのが本当の言語 の意味で、これは普通の教科を使って はできない。
- *片桐さんが、G.D.M は言語万能主義に 反対する立場にあると言ったがそれは ぞういうことか。M:言語は真実の世 界のそのままの写しではない。伝達手 段のうちのひとつである。ことばが、 context によって種々な働きをするこ とに目をつけ、言語さえあれば何ではな く、道具として扱う態度をとるべきと いうことだろうと自分は思うが。
- *G.D.Mでやるとspeed が遅く不自然 な英語になると言われることについて。 M:これは状況による。外国に行った 時は通じるだけでよいが,教室ではあ とでよく使えるようになることを考え なければならないだろう。日本人の英語と思われてもよいではないか。米語 でも英語でもなくても,明解によくわ かる英語だったらよいではないか。
- *教科書との組み合わせとして、教科書の文型と、ETPの文型をcoverしてして、しかも合理的なgradingによってテキストを作ったとすれば、それはBasicの主旨と離れるか。M:おそらくそのテキストは、ETPと大そう似たものになるだろう。
- *ETPからfull Englishへの発展について。M:これは一番難しい問題。一挙にfull English に行かず、たとえば、名詞や形容詞で出て来たものを動詞として使うことから始めるなど相当な工夫が必要だろう。
- *以上のほか、ことばの意味が教えて始

- めてわかった。G.D.Mで始めてことば の面白さがわかったというような話し 合いがあった。
- C. 第3日目には、片桐さんが2月に大阪 で行った話(関西支部ニューズ、No.22) 参照)のテープを聞いて、それについ て、また脱線して、種々の話し合いを した。
 - *片桐さんがG.D.M がゲリラ的と言うの は, 学校でなく, 学校外の実践に期待 をかけているのではないだろうか。
 - * minority から広げる方法が考えられ ないか。
 - *あまり親切に(教師に対して)しては creativity がなくなる。
 - *しかし現場の教師は多忙なので teaching suggestion を豊富に与え、楽に教え られるようにする必要がある。

- *言語とは何か、意味とは何かを知らな いで英語を教えている人が多いのでこ の面でも努力が必要。
- *実践してみるとだんだんわかる。理論 と実践は互に助け合う。

この会期中に推せんされた図書

*Basic English, International Second ¥ 3,000 Language

前半は、Basic の説明の総集。後半は Basicで書かれたものの抜すい。

(株)スクールブック サービスで

取扱っている。

住所・東京都新宿区早稲田鶴巻町442 新関さん ☎(202)2549・6591

- *「850語で書く英語」室勝著 Japan Times
- *「500語でできる英会話」室勝著 評論社 市販している。

評 重 版 好 な る

三百に ジ を開け ブ 0) ここに扱 及び、 効果を高 ッ 余年 高 クを添えた。 校、 ば に 絵を使った文型練習が得られ 教 わ わ 科書 めるため の種類、学年に関係なく、

講習会、 家 庭での学習に

最

適

に

初

中

上級別

の

A5判函入 クブック三冊添付 (テキスト 定価六五〇円

ワー

究され 論 言語伝達の理論 1 ž ま ۴ 入門 大学 7 75 な 期 ると 0 47 が、 I たる研 れた文法事 に • は 聴 基 覚 そ A づ え 的 の 47 効果 究と実践 IJ な な教授法 た英語教授法 チ 項、 ャ 的 な用 本書の著 1 語法、 z. ズ から 博 法 役 ₩ 士の は 立 を学 基 者 4. 12 まと 402 分 本 は ح 語 に め で

東京都千代田区神田錦町3-26 大修館書店 Tel(291)3961—5

~

る。

玉 際 丰 IJ ス 1 教大学 講 師 吉 沢 美 穂 著

Summr Seminar に参加して

成井幸子

夏のセミナーの収穫は私の英語学習に対する方向づけという意味で良い示唆を与えてくれた。会員の立場上ABCに分けられてありたまたま私はAコースに組分けされてあったので実際B.C.コースで具体的に何が取り上げられ語られたか知る事が出来なかったが、立場を異にする仲間と経験や問題を話し合う横の交わりがあっても良かったように思えたが行政上致し方なかったのだろう。

第一日目にセミナー中に持たれる分科会の在り方について、E. P. を教える上での実際的な suggestion が与えられたいとする意見と私のようにGDMの理論的背景を知りたいとする者との意見のずれがあったが、室先生の講演、片桐先生の意味論紹介、折々に与えられた諸先生の話しの中で、特に最後の討論会(Aコース分科会)での話し合いの中で問題解決へのカギが与えられた事は感謝であった。

言語を扱う立場にある者達が目標の曖昧さの為に唯カッコイイ英語屋になりつ、あるのではないかという反省を深めると共にC. K Ogden によるBasic Englishの生い立ち、それを取り上げたI. A Rechard がE. P. を通して打ち出した International second Language に対する思想ともいうべきもの、そしてそれを使いこなす場合のtechnique、更に実際子供が直面する"難かしさ"についてロシヤ語を使って(I. Youと例の如く)経験できたことは貴重な勉強であった。

今日のように言葉が軽く扱われ何でもコンピューターが答を出す情報社会で、我々は何が合法的であり経済性があるかを考える視点を失いがちである。言語がもっと深い所で成り立ち関りを持ち、然もこれは Communication の道具の一部にすぎず、これを正しく使

うことのできる訓練を小さい時から育せてことが大切であるということだ。言葉のAmbi-guityにメスを入れたという点でRechardsはもっと高く評価されてよいだろう。言葉が正しく扱われる為の意味論的立場についてI.Sハヤカワ氏の「思考と行動に於ける原理」を読んで一そう感銘を与えられた。即ち言葉を教える事と教育とが交わる接点についてである。G.D.Mが今日、そのユニークな教授法として改めて認識されつ、ある事を聞いて大いに意を強くすると共に、一層会員の努力がもして改めて認識されて、一層会員の努力がでもいると対したの話し合い、SEN-SIT.やGRADEが何故必要であるのかという点等更に意味論的アプローチを深めることが大切

なのではないだろうか。

セミナー最後の反省会の時にG.D.Mはも っと外側に向って働きかけるべきだとか、良 いものであるが故に必要ないのだ等折合わな かったが、私はいづれも正しいように思えた。 が少くともセミナーに参加する者達が何かも っと確かさにふれて帰れるように企画面その 他で一そう努力していただきたいと思う。セ ミナーによって結ばれた仲間が読書会を持っ て励ましを与えられたり、テーマ課題を与え られたり、better なHand book が作られた り、Reading materials が組まれたりするこ とは現状を一歩も二歩も前進させるものであ り,会員を育てる意味で大きな支えとなるだ ろう。そして毎度例会に出られぬ方々の為に グループ作りと連絡網による暖かな手が差し のべられることを期待したい。そして更に大 阪Y. M. C. A のような強力なブランチが東 京にも地方にもできて一人で迷ったりするこ とのロスをなるべく避け得るような行政的な 企画も先生方と協力して作りたいものである。

Graded Direct Method Summer Seminar のお知らせ

とき : 1971年8月17日(金)~21日(火) ところ:東山荘(静岡県御殿場市東山)

講師 : 吉沢美穂 (ICU 講師・ハーバード 大学言語研究所日本代表)

東山 永 (GDM鎌倉グループ代表) 片桐ユズル (松蔭女子大学助教授) 升川 潔 (東京女子大学短大部助教授)

中郷安浩 (大阪市立大助教授 スピーチ・クリニック担当) 山田初裕 (都立王子工業教論)

内容 : Graded Direct Method の理論と 実際を,小学5.6年生クラスで実習し

> たり討論しながら習得する。ほかに スピーチ・クリニック、レクリエー ション、特別プログラム、elc。

資格 :英語教育に熱意のある人ならどなた

でも

費用: 受講料7,000円+申込金1,000円 宿泊料7,000円(4泊食事付) 計15,000円, ほかにテキスト代

申込方法: 申込金1,000円を同封して7月31 日までに大阪市西区土佐堀2丁目12 大阪YMCA英語学校GDM Seminar 係まで申しこんでください。Tel. (06)441-0892 ただし定員50人に達 ししだいしめきります。

同時にAdvanced Groupを平行して作ります。 資格は 1.G D M会員であること 2.セミナー 参加経験 1回以上の方で、内容は今進行中の Proiect、教授法の開拓など自主研究とします。 費用は上記の内受講料を5,000円とします。 (計13,000円) 申込方法等は上記の通りです。

共催 :英語教授法研究会

大阪YMCA英語教育研究所

$GDM \cdot = \pi - \vec{x}$

- ●語研の黒川さん…GDM会員の中ではメヅラシク事務に有能な人ですが…3月に結婚。 今後マスマスハリキッテ会報を作ってくれることでしょう。
- ●関西支部では有志でBasic English International Second Languageをよんでいます。次はThe open classroon (Herbert R. Kohl). Teacher (Sylvia Ashton-Warner)などの予定。 東京その他もガンバリましょう。
- アメリカ旅行中の片桐さんから、「社会の 矛盾はまず医療と教育において破裂しそう です」との便り。日本では目下司法でもめ ていますが、それぞれに大きな共通点があ

るようです。"聖職"という名に呪あれ!

- 関西でも公開講演会をやりたいという声が あがる。
- ■関西支部で雑用をいかにこなしていくかと 考えています。一部の人達の犠牲的情熱で は限りがありそうです。いづこも同じ悩み。

